

1 距離空間と距離関数

定義 1.1 (距離関数). X を空でない集合とする。写像 $\rho : X \times X \rightarrow \mathbb{R}$ が距離関数 (*metric function*) であるとは、 ρ が任意の $x, y, z \in X$ について、次の性質を満たすことである。

D1) $\rho(x, y) \geq 0$ $\rho(x, y) = 0 \Leftrightarrow x = y$ (正定値性)

D2) $\rho(x, y) = \rho(y, x)$ (対称性)

D3) $\rho(x, z) \leq \rho(x, y) + \rho(y, z)$ (三角不等式)

X 上に距離関数 ρ が与えられたとき、 (X, ρ) を距離関数 ρ による距離空間 (*metric space*) と言う。

定義 1.2 (ノルム空間). V を \mathbb{R} 上の線形空間とする。写像 $\eta : V \rightarrow \mathbb{R}$ がノルム (*norm*) であるとは、 η が任意の $u, v \in V, \lambda \in \mathbb{R}$ について、次の性質を満たすことである。

N1) $\eta(u) \geq 0$ $\eta(u) = 0 \Leftrightarrow u = 0$ (正定値性)

N2) $\eta(\lambda u) = |\lambda| \eta(u)$ (スカラー倍)

N3) $\eta(u + v) \leq \eta(u) + \eta(v)$ (三角不等式)

X 上にノルム η が与えられたとき、 (X, η) をノルム η によるノルム空間 (*normed space*) と言う。

練習問題 1.1 (ノルムから導かれる距離). (V, η) をノルム空間とすると、

$$\rho_\eta(u, v) = \eta(u - v) \text{ for } \forall u, v \in V$$

とおいたとき、 $\rho_\eta : V \times V \rightarrow \mathbb{R}$ は距離関数になることを示せ。このとき、 ρ_η をノルム η から導かれた距離と言う。

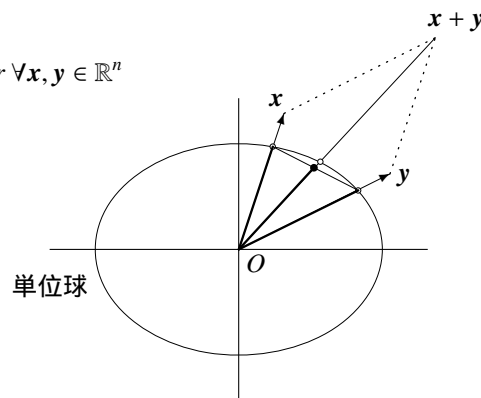
補題 1.1 (ミンコフスキーの不等式). 任意の $x = (\xi_1, \xi_2, \dots, \xi_n) \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$\|x\|_p = \left(\sum_{j=1}^n |\xi_j|^p \right)^{\frac{1}{p}}$$

とおいたとき、

$$\|x + y\|_p \leq \|x\|_p + \|y\|_p \text{ for } \forall x, y \in \mathbb{R}^n$$

が成立する。この不等式をミンコフスキーの不等式と言う。



¹ 数学工房 <http://www.sugakukobo.com/>

証明. 第1段)

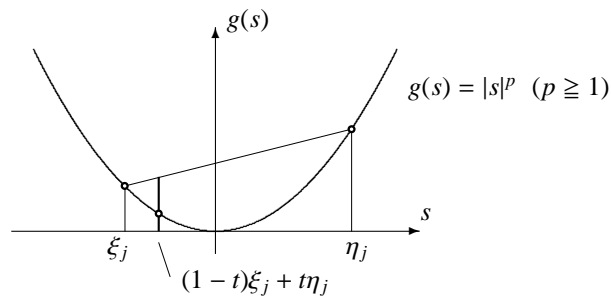
$$\bar{B}_p = \{x \in \mathbb{R}^n \mid \|x\|_p \leq 1\}$$

とおいたとき、 \bar{B}_p が凸図形になることを示す。

任意の $x = (\xi_1, \xi_2, \dots, \xi_n)$, $y = (\eta_1, \eta_2, \dots, \eta_n) \in \bar{B}_p$ に対して、

$$\|(1-t)x + ty\|_p^p = \sum_{i=1}^n |(1-t)\xi_i + t\eta_i|^p \quad 0 \leq t \leq 1$$

ここで、 $g(x) = |x|^p$ ($p \geq 1$) を考えると、 g は x の凸関数であるから、



$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^n |(1-t)\xi_i + t\eta_i|^p &= \sum_{i=1}^n g((1-t)\xi_i + t\eta_i) \leq \sum_{i=1}^n ((1-t)g(\xi_i) + tg(\eta_i)) \\ &= (1-t) \sum_{i=1}^n g(\xi_i) + t \sum_{i=1}^n g(\eta_i) = (1-t) \sum_{i=1}^n |\xi_i|^p + t \sum_{i=1}^n |\eta_i|^p \end{aligned}$$

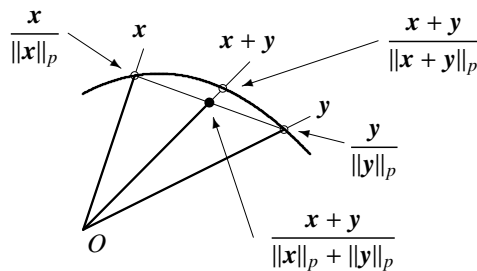
$$\therefore \|(1-t)x + ty\|_p^p \leq (1-t)\|x\|_p^p + t\|y\|_p^p$$

$x, y \in \bar{B}_p$ より、 $\|x\|_p \leq 1$, $\|y\|_p \leq 1$ だから、

$$\|(1-t)x + ty\|_p^p \leq (1-t)\|x\|_p^p + t\|y\|_p^p \leq (1-t) + t = 1$$

したがって、 $(1-t)x + ty \in \bar{B}_p$ とならから、 \bar{B}_p は凸図形である。

第2段) \bar{B}_p が凸図形になることを使って、ミンコフスキーの不等式を導く。 $x = 0_{\mathbb{R}^n}$ または、 $y = 0_{\mathbb{R}^n}$ のときは明らかだから、 $x \neq 0_{\mathbb{R}^n}$ かつ、 $y \neq 0_{\mathbb{R}^n}$ とする。



図から，幾何学的には， $\frac{\mathbf{x} + \mathbf{y}}{\|\mathbf{x} + \mathbf{y}\|_p}$ は単位球 \widetilde{B}_p の球面上にあるのに対し， $\frac{\mathbf{x} + \mathbf{y}}{\|\mathbf{x}\|_p + \|\mathbf{y}\|_p}$ は \widetilde{B}_p の内部に入っていることが分かる．

$$\frac{\mathbf{x} + \mathbf{y}}{\|\mathbf{x}\|_p + \|\mathbf{y}\|_p} = \left(\frac{\|\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p + \|\mathbf{y}\|_p} \right) \cdot \frac{\mathbf{x}}{\|\mathbf{x}\|_p} + \left(\frac{\|\mathbf{y}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p + \|\mathbf{y}\|_p} \right) \cdot \frac{\mathbf{y}}{\|\mathbf{y}\|_p}$$

と変形すれば $\frac{\mathbf{x}}{\|\mathbf{x}\|_p}, \frac{\mathbf{y}}{\|\mathbf{y}\|_p} \in \widetilde{B}_p$ だから， \widetilde{B}_p が凸図形であることにより $\frac{\mathbf{x} + \mathbf{y}}{\|\mathbf{x}\|_p + \|\mathbf{y}\|_p} \in \widetilde{B}_p$ となるから、

$$\left\| \frac{\mathbf{x} + \mathbf{y}}{\|\mathbf{x}\|_p + \|\mathbf{y}\|_p} \right\|_p \leq 1$$

$$\therefore \|\mathbf{x} + \mathbf{y}\|_p \leq \|\mathbf{x}\|_p + \|\mathbf{y}\|_p$$

□

定理 1.1. 任意の $\mathbf{x} = (\xi_1, \xi_2, \dots, \xi_n) \in \mathbb{R}^n$ に対して、

1.

$$\|\mathbf{x}\|_p = \left(\sum_{i=1}^n |\xi_i|^p \right)^{\frac{1}{p}} \quad (p \in \mathbb{R}, p \geq 0)$$

と定義するとき、 $\|\cdot\|_p : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ はノルムである。このとき、 $\|\mathbf{x}\|_p$ を \mathbf{x} の p 乗ノルムと言う。

2.

$$\|\mathbf{x}\|_\infty = \max\{|\xi_i| \mid 1 \leq i \leq n\}$$

と定義するとき、 $\|\cdot\|_\infty : \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ はノルムである。このとき、 $\|\mathbf{x}\|_\infty$ を \mathbf{x} のスーブ・ノルムと言う。

練習問題 1.2. $\|\cdot\|_p, \|\cdot\|_\infty$ から導かれる以下の関数は、すべて距離関数であることを示せ。

1. $d_p(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|_p$

2. $d_\infty(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|_\infty$

3. $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \frac{\|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|_p}{1 + \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|_p} \quad p \geq 1, p = \infty$

4. $d(\mathbf{x}, \mathbf{y}) = \begin{cases} \|\mathbf{x} - \mathbf{y}\|_p & (\mathbf{x}, \mathbf{y} \text{ が線形従属なとき}) \\ \|\mathbf{x}\|_p + \|\mathbf{y}\|_p & (\mathbf{x}, \mathbf{y} \text{ が線形独立なとき}) \end{cases} \quad p \geq 1, p = \infty$

1.1 上限

定義 1.3 (上限・下限). M を数直線 \mathbb{R} の空でない部分集合とすると、

$$U(M) = \{u \in \mathbb{R} \mid m \leq u \text{ for } \forall m \in M\}$$

$$L(M) = \{l \in \mathbb{R} \mid l \leq m \text{ for } \forall m \in M\}$$

により定義される集合 $U(M)$ を集合 M の上界 (*upper bound*)、集合 $L(M)$ を集合 M の下界 (*lower bound*) と
言う。 $U(M) \neq \emptyset$ のとき M は上に有界 (*bounded*)、 $L(M) \neq \emptyset$ のとき M は下に有界と言う。

M が上に有界なとき、 $\min U(M)$ を M の上限 (*supremum*) といい、 $\sup M$ と記す。

M が下に有界なとき、 $\max L(M)$ を M の下限 (*infimum*) といい、 $\inf M$ と記す。

命題 1.1 (Weierstraß の公理 (制限完備性))。任意の上に有界な \mathbb{R} の部分集合 M は上限 $\sup M$ をもつ。す
なわち、 \mathbb{R} の空でない集合 M が上に有界であれば、集合 M の上限が存在する。

定理 1.2. 上限について、次のことが成り立つ。

1. \mathbb{R} の部分集合 M が $\sup M$ を持つとき、ただ一通りに定まる。

2. $s = \sup M$ であるための必要十分条件は、

$$(a) m \leq s \quad (\forall m \in M)$$

(b) $x < s$ ならば、 $x < m \leq s$ を満たす $m \in M$ が存在する。

が成り立つことである。

3. $M \subset N$ ならば、 $\sup M \leq \sup N$

1.2 集合の直径と有界性

定義 1.4 (開球)。距離空間 (X, ρ) が与えられているとき、任意の $r > 0$ 、 $x_0 \in X$ に対して、 x_0 を中心とした半
径 r の ρ -開球 (*open ball*) を

$$B_r(x_0) = \{x \in \mathbb{R}^n \mid \rho(x, x_0) < r\}$$

で定義する。

定義 1.5 (直径)。 A を距離空間 (X, ρ) の部分集合とするとき、

$$\text{Diam}_\rho(A) = \sup\{\rho(x, y) \mid x, y \in A\}$$

を集合 A の直径と言う。 $\text{Diam}_\rho(A) < \infty$ のとき、 $A \subset X$ は有界という。

練習問題 1.3.

1. $\text{Diam}_\rho(B_r(x_0, \rho)) \leq 2r$ for $\forall x_0 \in X$

2. $A \subset B \Rightarrow \text{Diam}_\rho(A) \leq \text{Diam}_\rho(B)$

3. A が有界であるための必要十分条件は、任意の $x_0 \in X$ を固定するとき、 $r > 0$ が存在して、 $A \subset B_r(x_0)$
を満たすことである。

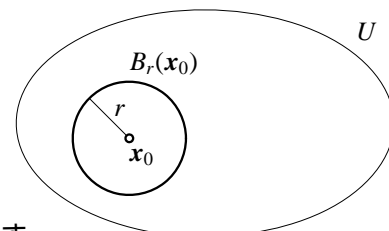
4. $A_1, A_2, \dots, A_m \subset X$ が有界なとき、 $\bigcup_{j=1}^m A_j$ は有界である。

1.3 近傍・点列

1.3.1 近傍系

定義 1.6 (近傍). (X, ρ) を距離空間とする。任意の $x_0 \in X$ に対して、集合 $U \subset X$ が x_0 の近傍 (neighborhood) であるとは、 $r > 0$ が存在して

$$B_r(x_0) \subset U$$



を満たすことである。 x_0 の近傍全体の集合を x_0 の近傍系といい、 $\mathfrak{B}(x_0)$ と記す。

命題 1.2. 近傍は次の性質を満たす。

V1) U が x_0 の近傍ならば、 $x_0 \in U$

V2) U, V が x_0 の近傍ならば、 $U \cap V$ は x_0 の近傍

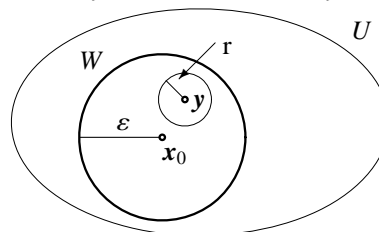
V3) U が x_0 の近傍で、 $U \subset V$ ならば、 V は x_0 の近傍

V4) U が x_0 の近傍ならば、 x_0 の近傍 $W \subset U$ が存在して、任意の $y \in W$ に対し、 U は y の近傍である。

練習問題 1.4. 近傍の公理 V4).

U が x_0 の近傍ならば、 x_0 の近傍 $W \subset U$ が存在して、任意の $y \in W$ に対し、 U は y の近傍である。

を示せ。



証明. U は x_0 の近傍だから、定義より、

$$\exists \varepsilon > 0 \text{ such that } B_\varepsilon(x_0) \subset U$$

$B_\varepsilon(x_0)$ も x_0 の近傍になることに注意して、 $W = B_\varepsilon(x_0)$ とおいたときに、任意の $y \in W$ に対して、 U が y の近傍になっていることを示せばいい。実際、

$$r = \min\{\rho(x_0, y), \varepsilon - \rho(x_0, y)\}$$

とおけば、 $z \in B_r(y)$ ならば、

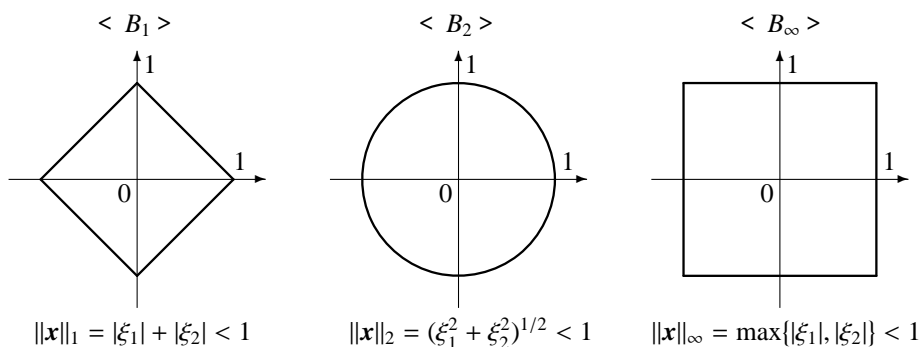
$$\rho(z, x_0) \leq \rho(z, y) + \rho(y, x_0) \leq \varepsilon - \rho(y, x_0) + \rho(y, x_0) = \varepsilon$$

より $z \in B_\varepsilon(x_0)$ だから、 $B_r(y) \subset B_\varepsilon(x_0) = W$. したがって、 $B_r(y) \subset W$ なる $r > 0$ が存在する。 $W \subset U$ だから、近傍の性質 V3. により、 U は y の近傍である。□

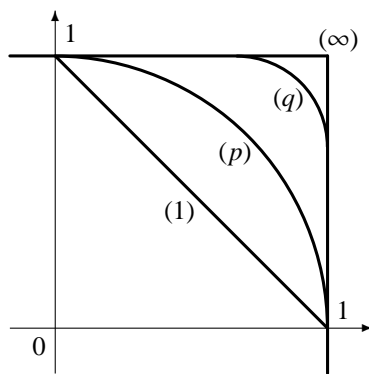
1.3.2 開球の具体例

- 1) $B_1 := \{x \in \mathbb{R}^n \mid \|x\|_1 < 1\}$ 単位球
- 2) $B_2 := \{x \in \mathbb{R}^n \mid \|x\|_2 < 1\}$ ユークリッド単位円板
- 3) $B_\infty := \{x \in \mathbb{R}^n \mid \|x\|_\infty < 1\}$

二次元空間 $x = (\xi_1, \xi_2) \in \mathbb{R}^2$ を例にとる .



開球の大きさ (四分球で比較)
 $1 < p < q < \infty$ の場合



1.4 点列と点列の収束

定義 1.7 (点列と点列の収束). 距離空間 (X, ρ) が与えられているとき、写像 $\varphi : \mathbb{N} \rightarrow X$ を X の点列と言う。 X の点列全体の集合を $Map(\mathbb{N}, X)$ と表す。点列 $\varphi : \mathbb{N} \rightarrow X$ が $x_0 \in X$ に収束するとは $\rho(\varphi(n), x_0) \rightarrow 0$ ($n \rightarrow \infty$) なることを意味する。すなわち

$$\forall \varepsilon > 0, \exists n_0 \in \mathbb{N} \text{ such that } \rho(\varphi(n), x_0) < \varepsilon \text{ for } \forall n \geq n_0$$

このとき、 $\varphi(n) \rightarrow x_0$ ($n \rightarrow \infty$) あるいは、 $x_0 = \rho - \lim_{n \rightarrow \infty} \varphi(n)$ と記す。

練習問題 1.5. 点列 $\varphi: \mathbb{N} \rightarrow X$ が点 $x_0 \in X$ に収束する必要十分条件は、任意の x_0 の近傍 V に対して

$$\exists n_0 \in \mathbb{N} \text{ such that } \varphi(n) \in V \text{ for } \forall n \geq n_0$$

が成立することである。

定義 1.8 (Cauchy 列). 距離空間 (X, ρ) が与えられたとき、点列 $\varphi: \mathbb{N} \rightarrow X$ が Cauchy 列であるとは、

$$\forall \varepsilon > 0, \exists n_0 \in \mathbb{N} \text{ such that } \rho(\varphi(m), \varphi(n)) < \varepsilon \text{ for } \forall m, n \geq n_0$$

が成立することである。

練習問題 1.6.

1. 点列 $\varphi: \mathbb{N} \rightarrow X$ が収束するとき、極限 $x_0 \in X$ は唯一確定する。
2. 点列 $\varphi: \mathbb{N} \rightarrow X$ が与えられているとき、 $\tau: \mathbb{N} \rightarrow \mathbb{N}$ が狭義単調 (すなわち $m < n \Rightarrow \tau(m) < \tau(n)$) ならば、 $\varphi \circ \tau: \mathbb{N} \rightarrow X$ を点列 φ の部分列という。点列 $\varphi: \mathbb{N} \rightarrow X$ が収束するとき、部分列 $\varphi \circ \tau: \mathbb{N} \rightarrow X$ は同一の点に収束する。
3. 点列 $\varphi: \mathbb{N} \rightarrow X$ が収束するとき、集合 $\{\varphi(n) \mid n \in \mathbb{N}\}$ は有界。
4. $\lim_{n \rightarrow \infty} \varphi(n) = a, \lim_{n \rightarrow \infty} \theta(n) = b$ ならば、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \rho(\varphi(n), \theta(n)) = \rho(\lim_{n \rightarrow \infty} \varphi(n), \lim_{n \rightarrow \infty} \theta(n)) = \rho(a, b)$$

5. 点列 $\varphi: \mathbb{N} \rightarrow X$ が収束するとき、点列 $\varphi: \mathbb{N} \rightarrow X$ は Cauchy 列である。

2 位相空間

2.1 点の位相的分類

定義 2.1. 距離空間 (X, ρ) の部分集合 M が与えられているとする。 $x \in X$ の近傍全体の集合を $\mathfrak{B}(x)$ とするとき、

1. $x \in M$ が M の内点 (interior point) であるとは、 $M \in \mathfrak{B}(x)$ を満たすことである。すなわち、

$$\exists r > 0 \text{ such that } B_r(x) \subset M$$

M の内点全体の集合を開核 (interior) と呼び、 M^i と記す。

$$M^i = \{x \in M \mid x \text{ は } M \text{ の内点}\}$$

2. $x \in X$ が M の触点 (adherent point) であるとは、 $\forall V \in \mathfrak{B}(x)$ に対し、 $V \cap M \neq \emptyset$ を満たすことである。 M の触点全体の集合を閉包 (closure) と呼び、 M^a と記す。

$$M^a = \{x \in X \mid x \text{ は } M \text{ の触点}\}$$

3. $x \in X$ が M の外点 (*exterior point*) であるとは、 x が M^c の内点であることである。すなわち $x \in (M^c)^i$ M の外点全体の集合を外核 (*exterior*) と呼び、 M^e と記す。すなわち

$$M^e = \{x \in X \mid x \text{ は } M \text{ の外点}\} = (M^c)^i$$

4. $x \in X$ が M の境界点 (*boundary point*) であるとは、 $\forall V \in \mathfrak{B}(x)$ について、 $X \cap M \neq \emptyset$ かつ、 $X \cap M^c \neq \emptyset$ を満たすことである。すなわち、

$$x \in M^a \cap (M^c)^a$$

M の境界点全体の集合を境界 (*boundary*) と呼び、 M^f と記す。

$$M^f = \{x \in X \mid x \text{ は } M \text{ の境界点}\} = M^a \cap (M^c)^a$$

5. $x \in X$ が M の集積点 (*accumulation point*) であるとは、 x が $M \setminus \{x\}$ の触点であることである。すなわち、

$$x \in (M \setminus \{x\})^a$$

6. $x \in X$ が M の孤立点 (*isolated point*) であるとは、 $x \in M$ かつ、 $x \in X$ が M の触点にならないことである。

練習問題 2.1. (X, ρ) を距離空間。 M を X の部分集合とするとき、

1. (a) $M^i \subset M$
 (b) $M \subset M^a$
 (c) $M^e \subset M^c$
2. $M^f = M^a \setminus M^i$
3. (a) $X = M^i \cup M^f \cup M^e$ (互いに素)
 (b) $M^e = (M^c)^i$
 (c) $(M^a)^c = M^e$
 (d) $M^f = M^a \cap (M^c)^a$
 (e) $M^f = (M^c)^f$

練習問題 2.2. (X, ρ) を距離空間。 M を X の部分集合とするとき、

1. $M \subset N \Rightarrow M^i \subset N^i$
2. $M \subset N \Rightarrow M^a \subset N^a$

2.2 開集合・閉集合

定義 2.2 (開集合). (X, ρ) を距離空間とする。 X の部分集合 U が、 $U = U^i$ を満たすとき、 U を開集合 (*open set*) という。

$$\mathfrak{D}_\rho(X) = \{U \in 2^X \mid U = U^i\}$$

を距離空間 (X, ρ) の開集合系という。

定義 2.3 (閉集合). (X, ρ) を距離空間とする。 X の部分集合 A が、 $A = A^a$ を満たすとき、 A を閉集合 (*closed set*) という。

$$\mathfrak{A}_\rho(X) = \{A \in 2^X \mid A = A^a\}$$

を距離空間 (X, ρ) の閉集合系という。

定理 2.1 (開集合の性質).

1. X, \emptyset は開集合である。
2. U, V が開集合ならば、 $U \cap V$ は開集合である。
3. $\{A_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ は X 上の開集合族とするなら、 $\bigcup_{\lambda \in \Lambda} A_\lambda$ は開集合である。
4. 任意の $x \in X$, $r > 0$ に対して、

$$B_r(x) = \{y \in X \mid \rho(y, x) < r\}$$

は開集合である。

5. M^i は M に含まれる最大の開集合である。

練習問題 2.3. 開集合の性質

5. M^i は M に含まれる最大の開集合である。

を示せ。

証明. M^i が開集合であること.) $(M^i)^i \subset M^i$ だから、 $M^i \subset (M^i)^i$ となることを示せばいい。任意の $x \in M^i$ に対して定義より、 $M \in \mathfrak{B}(x)$ だから近傍の公理 V4) により、 $W \subset M$ なる x の近傍 W が存在して、 $y \in W$ ならば、 $M \in \mathfrak{B}(y)$ を満たす。したがって、 $\forall y \in W \Rightarrow M \in \mathfrak{B}(y) \Rightarrow y \in M^i$ だから、 $W \subset M^i$. 近傍の公理 V3) により、 $M^i \in \mathfrak{B}(x)$. 故に、 $x \in (M^i)^i$ だから、 $M^i \subset (M^i)^i$.

M^i の最大性.) $U \subset M$ を M に含まれる開集合とすれば、 $U^i = U$ だから任意の $x \in U$ に対して、 $U \in \mathfrak{B}(x)$. 近傍の公理 V3) により、 $M \in \mathfrak{B}(x)$. ゆえに、 $x \in M^i$ だから、 $U \subset M^i$.

□

定理 2.2. 距離空間 (X, ρ) の部分集合 $A \subset X$ について次は同値である。

1. $A \subset X$ が閉集合である。
2. A の補集合 A^c は開集合である。

3. 任意の点列 $\varphi: \mathbb{N} \rightarrow A$ が X における収束列ならば、 $\rho - \lim_{n \rightarrow \infty} \varphi(n) \in A$ である。

練習問題 2.4. 1. と 3. の同値性を示せ。

証明. 1. \Rightarrow 3.) $\rho - \lim_{n \rightarrow \infty} \varphi(n) = x_0 \in X$ とおけば収束の定義により、任意の $V \in \mathfrak{B}(x_0)$ に対して、 $\varphi(n) \in V$ ($n \geq n_0$) なる $n_0 \in \mathbb{N}$ が存在する。このとき、 $n \geq n_0$ を満たす $n \in \mathbb{N}$ に関して、 $\varphi(n) \in V \cap A$ だから、 $V \cap A \neq \emptyset$ 。したがって、 $x_0 \in A^a$ となるから、 A が閉集合であることにより、 $x_0 \in A$ 。

3. \Rightarrow 1.) $\forall x_0 \in A^a$ とすれば、閉包の定義により、

$$\varphi(n) \in B_{\frac{1}{n}}(x_0) \cap A \quad n = 1, 2, \dots$$

を満たす点列 $\varphi: \mathbb{N} \rightarrow A$ を作ることができる。このとき、 $\rho - \lim_{n \rightarrow \infty} \varphi(n) = x_0$ となるから、仮定から $x_0 \in A$ 。故に、 $A^a \subset A$ を満たすから、 A は閉集合である。

□

定理 2.3 (閉集合の性質).

1. X, \emptyset は閉集合である。
2. U, V が閉集合ならば、 $U \cup V$ は閉集合である。
3. $\{A_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ は X 上の閉集合族とするなら、 $\bigcap_{\lambda \in \Lambda} A_\lambda$ は閉集合である。
4. 任意の $x \in X$, $r > 0$ に対して、閉球

$$\tilde{B}_r(x) = \{y \in X \mid \rho(y, x) \leq r\}$$

は閉集合である。

5. $M \subset X$ について M^a は、 M を含む包含関係における最小の閉集合である。

記録者 S.K. 編集 J.S